



勇者様にいきなり
求婚されたのですが 番外編

富樫聖夜

Seiya Togashi

RB

レジーナ文庫

ルース

アーリアの前に現れた謎の少年。見た目はエルフのようだが……？

ルイーゼ姫：
シュワルゼ国
第二女王

リュファス：
魔法使い

ファラ：
女戦士

レナス：
神官

ミリー：
女盗賊

アーリー

シュワルゼ国の魔法使い見習い。大きな魔力を持つが、コントロールが大の苦手。

ルファーガ：
エルフ

登場人物 紹介

アーリア

レベル : 1
保有スキル: 「ツッコミEX」。
(隠しスキル)

姫の侍女で、「勇者の婚約者」。グリードの求婚を受け入れたものの、ツンデレなせいでまだ「好き」と言っていない。

グリード

レベル : 測定不能
保有スキル: 「精霊の加護」、
「甦り術」その他
いっぱい。

「最強」かつ「最凶」の勇者。愛するアーリアを魔王城から救出し、二度目の求婚をした。

目次

告白大作戦

7

廻る刻めぐるとき

57

まりっじぶるー

197

翠みどりの悪魔を追い払う方法

259

書き下ろし番外編 親愛なる友へ

353

告白大作戦

あるところに、誰もが振り向く美貌を持った勇者様がおりました。

魔王を倒すため旅をしていた勇者様たち一行は、とある国の美しい姫が魔王に攫われ
たことを知ります。そしてすぐに救出に向かい、見事魔王を討ち果たして姫を救い出し
たのです。

姫と共に凱旋した勇者様は、二人が恋に落ちているものと信じて疑わない人々の前で、
求婚をしました。

「貴女を愛しています。どうか私の妻になってください」

……けれど、その言葉を告げた相手は姫ではなく、姫の侍女でした。

歴代の勇者の活躍を記す『勇者物語』の中では、おそらく侍女Aとも呼ばれるであ
ろうモブキャラだったのです。

* * *

その侍女Aことアーリア・ミルフォード——つまり私が、とても大事なことに気づい
たのは、ある日の午後のことでした。

勇者グリード様たちの手で魔王城から救い出されてから、ひと月ほど経ったその日。
私は仕事に復帰し、同僚の侍女Bことベリンダと共に侍女の控え室におりました。

私がお仕えるルイーゼ姫様は、勇者一行の魔法使いであるリュファス様に、近々嫁
ぐことが決まっておられます。リュファス様はエリユーシオンという大国の皇子でもあ
るのです。今、姫様は宰相様と共に、エリユーシオンからやってきた使者と今後のこと
を話し合っている最中。なので、私たち侍女はこうして控え室でのんびり過ごさせてい
ただいているのです。

お茶を淹れる私の横では、ベリンダが恋人に宛てた手紙をしたためておりました。

彼女は姫様がエリユーシオンに興入れする前に結婚退職することが決まっています。
ですが、あいにく彼女の婚約者が、しばらくの間隣国アルバトロに出張することになっ
てしまいました。それでベリンダは、彼に毎日せつせと手紙を送っているのです。

「よし、書けた！」

ベリンダはそう言っ、ペンを持ったまま顔を上げました。けれど、すぐに「あっ」という顔をしたかと思うと、再びペンを走らせませす。

「『愛しています。あなたのベリンダより』。やっぱり愛の言葉で締めないとね！」

「ふーん」

私は空返事をしながら、カップにお茶を注ぐのに集中します。この最後の一滴が重要なんですよね。

「何よう、そのそっけない返事は」

ベリンダは手紙を封筒に入れつつ唇を尖らせました。

「アーリアだって、グリード様と恋人同士になったんだから、愛の言葉くらい伝え合うでしょう？」

黄金の一滴をカップに落とした私は、ポットをワゴンに置きながら笑って答えます。

「そりゃあ、もちろん……」

けれど次の瞬間、私は笑顔のまま固まってしまいました。

……あれ？ 私、グリード様に「愛している」とか「好き」とか言ったこと、ありませんでしたっけ？

全然記憶がありません。グリード様はよくそんな言葉を口にしておりませんが、私はそっぽを向きながら「ありがとうございます」と言うくらいで、「私も」とすら言ったことがない気がします。いえ、気がするのではなくて、確実に言っってません。

私の様子を見ておおよそのことを察したのでしょう、ベリンダは口の端を引きつらせました。

「アーリア、もしかして……グリード様に気持ち伝えてない、とか……？」

「そ、そう……みたいです」

「ちょ……！ だったら、二人はどうやって恋人同士になったの？ 気持ちを伝え合わないで、恋人になれるわけがないでしょう？」

ベリンダの当然の疑問に、私はばつが悪そうに答えます。

「じ、実は……『恋人同士から始めましょう』と言っただけです……」

——ついこの間まで、魔族の幹部たちによって魔王城に軟禁されていた私。もちろんグリード様に対する人質としてです。

軟禁されていたのは短い間ですが、幹部の一人である翠に侍女としてこき使われたり、逃げるために魔王城内を探索したりと、忙しい日々を過ごしました。

最終的には婚約腕輪に隠された力が解放され、魔王城の結界が崩壊。グリード様やお

仲間の皆様がすぐに駆けつけてくださり、私は無事に助け出されたのです。

ただ、力が解放されたことで婚約腕輪が壊れてしまい、グリード様と私の関係は白紙に戻ってしまいました。ですが、廃墟となった魔王城の広間で彼に再び求婚されたのです。それはまさしくあのシユワルゼ城の広間で求婚された場面の再現でした。あの時とは違つてグリード様を好きになつていた私は、もちろん即OK——はせず、「恋人から始めましょう」ということにしたわけですが……

ペリンダが額ひたいに手を当てました。

「つまり、アリアが言ったのはそれだけつてことなのね。……グリード様が気の毒すぎて泣けてきそう」

ペリンダの言葉に非難の色を見て取り、私は慌てて弁解しました。

「だ、だってあの時は皆様が傍そばにいて、とてもじゃないですけど、そんな雰囲気には……」

「魔王城から帰つてきた後、いくらでも言う機会はあつたでしょ？」

「そ、そうですが……」

その通りなので、ぐうの音も出ません。帰還した直後は両親や兄も城にいましたし、何だかんだでバタバタしておりましたが、二人きりになる機会も何度ありました。ですから、その気になればいくらでも言えたはずなのです。

それでも私が口にしなかったのは、何となく自分の気持ちを伝えていた気になつていから。それと、恥ずかしくてツンデレを発揮してしまい、グリード様の「好き」「愛している」という言葉にまともな返事ができなかったからです。でも……

私はペリンダをちらつと見ながら尋ねました。

「やっばり、ちゃんと言葉にするべきですかね？」

ペリンダはふわふわしたピンクプロンドの髪を揺らしながら、真顔で頷きます。

「もちろん」

……やっばり言わないとダメですか。

「でも、きつとグリード様は『恋人から始めましょう』という言葉から察してくださいさつてる、はず……」

「あのグリード様が？」

「……そんなわけありませんよね、あのグリード様ですものね」

私はハハハと乾いた笑い声を発しました。決して頭の回転は悪くないグリード様ですが、人の心の機微くわいに疎といところがありました。あの言葉から私の気持ちを汲み取つてくれるなんてことは期待できません。

少し考えれば、私が好きでもなんでもない相手と恋人付き合ひするはずがないと、分

かりそうなものですが……。そこはまあ、グリード様ですからね。

「とにかく。アーリア、ちゃんと伝えないとダメよ？」

諭すように言われ、私はしぶしぶ頷きました。

「そ、そうですね。今更という感もありますが……」

「よし、さっそく今日にでも！」

……そう言って拳を上げたのは、私ではなく、なぜかベリンダでした。

ベリンダに煽られ、ちゃんと気持ちを伝えようと決心したものの、昼間は姫様のお世話という大事な仕事があります。

特に今は姫様の輿入れの準備で忙しく、また、グリード様たちも魔族の襲撃時に壊れた結果を修復するため、あちこちに駆り出されている状態なのです。午後のお茶の時間には、姫様の部屋に集まって休憩しながらおしゃべりしていますが、その時は他の皆様も一緒ですからね。

グリード様と二人きりで話ができるのは、仕事を終えた後に迎えに来ていただき、私の部屋まで送ってもらう間だけです。

も、もちろんグリード様は部屋には入りませんか？ 部屋の前まで送ってくださいるだ

けです。そこはちゃんと躰け……。いえいえ、教育しましたとも！

とにかく、グリード様に私の気持ちを伝えるなら、その時において他にはないでしょう。私はお茶の後片付けをしつつ、どう言おうかとアレコレ考えておりました。

夜の帳が下り、辺りがすっかり暗くなった頃。

私は姫様の寝支度を整えながら、今日も無事に一日を終えられたことを、女神様に感謝します。たったの二日間とはいえ、魔王城に囚われの身となって以来、平和が一番だと痛感しているのです。

本当に、平和は大事です。魔王城でのことを思い出すと、過去のグリード様のとつぴな言動ですら、平和な日常の一コマとして微笑ましく思えるほどですよ。

「もういいわ、二人とも。下がって休みなさい」

寝支度を終えた姫様は、私たちに言いました。

私の主であるルイーゼ様は、アルバトロに嫁いだ姉姫のマリアージュ様を除けば、この国一番の美女と誉れ高いお方です。オレンジがかった金髪に明るい緑の瞳と、非常に華やかでありながらも楚々とした容貌。更に性格も良くて、私の自慢の姫様なのです。

「はい。それではお言葉に甘えて失礼します。姫様、お休みなさいませ」

「お休みなさいませ、姫様」

私とベリンダは、姫様に向かって頭を下げました。

「ええ、また明日ね。アーリア、ベリンダ」

姫様は大きくて分厚い本を胸に抱えたまま、私たちに微笑みかけます。

それはエリユーシオンの歴史を詳細に記した書物で、その国の王家に嫁ぐ身として学ばなければと、姫様が自主的に読み進めているものです。エリユーシオン王室から教師が派遣されているので本を読まずとも良いのですが、姫様はもつと深く知りたいと仰り、睡眠時間を削って勉強していました。

第一侍女の私としては姫様が寝つくまでお傍にいたいのですが、勤務時間外だからと言って、姫様がそれを許してくれません。仕方ないので後は夜勤の侍女に任せ、私とベリンダは部屋を後にしました。

「アーリア」

姫様の部屋を出たところで、声をかけられました。グリード様です。どうやら私の仕事が終わるのを待っていてくださったようです。

「迎えにきました」

グリード様はそう言って微笑みます。この笑みを毎日のように向けられているのに、

未だ面はゆいのはなぜでしょうか。

「あ、ありがとうございます」

私は頬を少し染めつつ、目を伏せて答えました。思いを自覚する前は全然平気だったのに、今は何となく直視できないのですよね。

「アーリア、私は先に帰ってるから、どうぞ二人でゆっくりしてちょうだい」

隣にいたベリンダが、私の肩をポンと叩きながら言いました。そして私に向けて、しきりに片目をパチパチと瞑ってみせます。どうやらウインクしているらしいのですが、あまりに下手すぎて、顔の半分が妙に歪んでいました。はつきり言って、とても変ですよ？ ベリンダ。

まあでも、ベリンダの言いたいことは分かります。つまり、この機会にちゃんと自分の気持ちを言葉にして伝えろと言いたいのでしょうか。

「ええ。分かったわ」

私はしっかりと頷きました。そうですよ。今告白しないで、いつすると言うのですか……！

「じゃあ、お先に。お休みなさい、二人とも」

「お休みなさい、ベリンダ」

ペリンダは最後にちらつと目配せしてから、廊下の奥に消えて行きました。それを見送る私の横に、グリード様がすつと並びます。その気配を感じて横を向いた私の手を取り、彼は優しく微笑みました。

「俺たちも行きましょう。ゆつくりと」

その少し冷たい手に握られて、顔にカアと熱が集まります。手を握られただけでこれですよ？ 私、どうしてしまったんでしょうか。

私が無言で頷くと、グリード様はゆつくりと歩き出します。彼に手を引かれて、私も廊下を歩き始めました。

最初は冷たかった彼の手は、すぐに私の体温で温められ、どこが境目だか分からなくなっています。でもそれがいいのだと思う私がいて……。恐ろしいほどの乙女思考に、自分でもびつくりするやら呆れるやらですよ。恋って怖いです。

もうツッコミ属性は返上しなければなりませんね。きつと今度は私が皆さんから、この乙女思考についてツッコミを入れられる番でしょうから。

恥ずかしいのをごまかすために、そんなことをつらつら考えていたら、グリード様か不意に口を開きました。

「姫の興入れの支度は、着々と進んでいるようですね」

グリード様の目は、ある部屋に向いていました。そこは織部と呼ばれる城専属のお針子さんたちの作業場です。王家の方々の普段着や、城で働く人たちの制服などは、みな彼女たちが作っているんですよ。もちろん、今私が着ている侍女服もそうです。

「はい。織部の皆様が頑張ってくださっているおかげです。……もしかして、まだ作業なさってますか？」

作業場の前を通り過ぎながら、私はちらりとそちらに視線を向けました。扉は閉まっているので中の様子は分かりません。ですが、精霊の目を通して室内の様子を知ることができるグリード様が、こう仰っているのです。ということは、彼女たちはおそらく今も……

グリード様が頷きました。

「ええ。まだ何人も残って作業していますね」

「やっぱり」

いつもならとっくに作業を終えている時間なので、きつと姫様がエリユーシオンに持っていくドレスや下着などを、急ピッチで仕上げているのでしょう。

「ありがたいことです。明日にでも姫様にお伝えして、美味しいお菓子か何かを差し入れさせていただこうと思います」

姫様ご自身は、あんな大事件が起きたばかりなので、輿入れの時期を延ばしたいと陛下に申し出られたのです。リュファス様とエリユーシオンの使者の方はそれで良いとおっしゃったのですが、陛下や宰相様が反対されました。事件の記憶も生々しい今だからこそ、それを払拭はらひするためのおめでたい行事が必要なのだと。

幸い死者は出なかつたために暗い雰囲気もなく、皆が一丸となって復興作業と輿入れ準備に精を出しております。むしろ、以前より活気があるような……。なんにしろ、城中が明るい雰囲気満ちているのはいいことです。

「やっぱり陛下や宰相様の仰る通り、おめでたい行事というのはいいですね」

私が歩きながらにこにこしていると、それを見たグリード様も笑顔になりました。

まだ私やお仲間の方たちの前でだけです、グリード様は以前より笑うようになった気がします。「普通の勇者」を目指して教育した甲斐かひがありましたよ。

……え？ その教育を始めた理由ですか？ そんな昔のことは忘れましても。求婚を撤回させるためだったなんて、記憶に残っておりません。

そんなことを考えつつ、二人してにこにこしながら歩いていたら、いつの間にか使用人棟へ続く回廊まで来ていました。

のんびりほのほのと歩いている場合じゃありませんでした！ 告白しないと……！

やっぱりここは、「今まで口にはしませんでしたけど、私はあなたが好きです」って正直に言うべきですよ？ ……いや、ただ一言「好きです」って言った方が……それとも、魔王城でプロポーズされた時に「愛してる」と言われたのですから「私もグリード様のことを愛しています」と言うべきか！

ってなことを頭の中でぐるぐる考えていたら、ああああああ、なぜかもう私の部屋の前なんですけど!? 早いですよ！ まだどう言おうか決めかねているのに！

部屋の扉の前で立ち止まると、グリード様は手をぎゅっと握りながら私を見下ろし、微笑みを浮かべました。

「ではアーリア、お休みなさい」

「え、お、お休みなさい」

つい反射的に言ってしまったから、私は壁にガンガンと頭を打ちつけたくなりました。違いますよ、私！ 「お休みなさい」じゃないでしょう!? 今言うべきことは何？

「好きです」でしょうが！

グリード様が私の手を放しました。そのまま帰ってしまいそうな彼に、私は慌てて声をかけます。

「あ、あのっ、グリード様！」

「はい？」

あああああ、な、なんでそこで首をこてんと傾げるんですかー？ そのしぐさ、可愛すぎるじゃないですか！ 耳とか尻尾とかの幻覚が見えてしまつて、萌え禿げそうですよ！

「アーリア？」

私が内心悶もたえていると、グリード様は首を傾げたままキョトンとしました。そりゃあ、呼び止めたくせに何も言わないのだから、不思議に思うのは当然ですよね。

私はごくんとつばを呑み込むと、例の言葉を紡紡ごうとしました。

「あの、私、その、グリード様のごとが……す……す……」

「す？」

「す……す……」

後は「き」と言うだけです。なのにどういうわけか、そのたった一音が私の喉のどから出てきません。

「アーリア、どうしました？」

グリード様が、今度は怪訝けげんそうに尋ねてきます。

「私、その、す……す……す……」

バカみたいに「す」という言葉を繰り返した挙句、とうとうグリード様の視線に耐えられなくなつた私は、顔を赤く染めてこう口走つたのです。

「な、何でもありません！」

——ああああ、私のバカアア！

またもや壁に頭を打ちつけたくなりましたが、もう口から出てしまったものは取り消せません。

「アーリア……？？」

私を見下ろすグリード様の青緑の瞳に、心配そうな色が浮かびます。私はアハハとごまかすように笑つて言いました。

「い、いえ、本当に何でもありません。グリード様、送ってくださいありがとうございます」

……仕方ない。また後日、仕切り直すことにいたしましたしょう。

「そうですね」

グリード様は、私の言葉に素直に頷きます。

「ではアーリア、また明日」

「はい。お休みなさい、グリード様」

にこつと笑顔を見せて立ち去っていくグリード様。その後ろ姿を見送った私は、その場で大きなため息をつきました。その直後、いきなり向かいの部屋の扉がバーンと音を立てて開きます。

「アーリアの意気地なし！」

そう言いながら姿を現したのは、先に帰っていたベリンダでした。実は彼女の部屋は、私の向かいなのです。おそらく扉の向こうで、私たちの会話を聞いていたに違いありません。

「べ、ベリンダ、盗み聞きなんて感心しませんよ？」

その言葉をスルーし、ベリンダは腰に手を当てて私を叱咤しじたしました。

「アーリアのバカ！ 『好き』ってさらっと言えばいいだけなのに！ もう、なんであそこまで言っておいて、引き下がっちゃうの？」

「だ、だって……」

どうしても恥ずかしくて、「き」が口から出なかったのですよ。本当に、自分でもびっくりです。その気になれば、いくらでも言えると思っていたのに。だって昔は思ソツったことミをすぐ口にして、侍女長様から叱られてばかりいたのですから。

でも当然ながら、ツツコミと愛の告白はまったく違うのです。

「恥ずかしい気持ちは分からないでもないけど、アーリアとグリード様は恋人同士でしよう？ 普通なら、愛の言葉を日常的に交わしているはずの関係なの。それが『好き』くらい言えなくてどうするの!？」

「う、うう」

その通りなので、反論できません。

ベリンダが声のトーンを落として私に問いかけます。

「ねえアーリア、姫様は好きよね？」

「え、ええ。好きです」

私は突然の質問に、目をパチパチさせて答えました。

「私は？ 同僚の皆は？ グリード様のお仲間の方たちは？」

「もちろん好きです」

「だったら、グリード様は？」

その質問の意味を悟って、私はカアと頬を染め、小さな声で答えました。

「……す、好きです」

「そう、素直に言えばいいのよ」

ベリンダはうんうんと頷きます。

「アーリアがそう言えばグリード様は間違ひなく喜ぶし、受け止めてくれるって分かってるんだから、その状況で言わないのは卑怯よ」

「ひ、卑怯……」

ガンとシヨックを受けました。でも……言われてみればそうかもしれない。私はグリード様から何度も「好き」「愛してる」と言われているのに、自分は一度も言っていないわけですから。

「明日は恥ずかしながらちゃんと言うのよ？」

「……ええ」

私は口をきゅつと結んで、決然と頷きました。

明日は、明日こそは、必ずグリード様に告白を……！

——けれど次の日も、私は口にすることができなかつたのです。

夜、部屋まで送ってくれたグリード様を、私は再び引き留めました。

「グ、グリード様、私はあなたのことが……そ、その……っ」

「アーリア？」

「あなたのことが……が、が、が」

……なんてことでしょう。昨日は「す」までは言えたのに、「き」どころか「す」すら言えなくなっているではありませんか！

「な、何でもありません……！」

そしてグリード様が廊下の奥に消えた後、またもやベリンダが向かいの部屋から飛び出してきました。

「アーリアの意気地なし！」

「……あ、明日こそは！」

——けれど、その次の日も、またその次の日も、私は告白することができなかつたのです……あれえ？

* * *

「アーリアも困つたものねえ」

ベリンダに付き添われ、部屋の真ん中に所在なさに立つ私を見て、ルイーゼ様があ

め息をつかれました。

「アーリアは思っていた以上に恥ずかしがり屋なんだね」

その傍らで苦笑なさっているのは、姫様の婚約者であるリュファス様です。

長い黒髪とキラメル色の瞳を持つリュファス様はエリユーシオンの第二皇子で、とても気品のあるお姿をしておられます。もつとも、ここでは勇者一行の魔法使いという立場を通されているため、身につけているのは魔法使いのローブですけどね。

「恥ずかしがり屋っていかさあ、ツンデレじゃないの？」

と呆れ顔で言ったのは、お二人の向かいのソファに座る女盗賊のミリー様でした。赤い短髪と鮮やかな緑色の瞳を持つ、姉御肌あねごはだでちよつと気の強い美人さんです。

そのミリー様の隣で、神官のレナス様が領きました。緑がかった髪を持ち、ゆつたりとしたローブと帽子を身につけておられます。

「うんうん。アーリアはもう完全にツンデレだよね」

勇者一行のムードメーカーでもあるレナス様は、神官らしからぬ明るい性格で、ミリー様とは恋人同士。そしてリュファス様、ミリー様ともども、グリード様とは幼馴染おとななじみなのです。

「そもそも、私はアーリアがまだグリードに気持ち伝えていなかったことに驚いたぞ」

そう言ったのは、窓際のソファに座る女戦士のファラ様でした。

長い金髪と青灰色の瞳を持つ美人さんです。言葉遣いは男性っぽいですが、思慮深く、それでいて少し天然なところが可愛らしいファラ様。男女問わず人気があり、「ファラお姉様」と慕したう人間は少なくありません。常に嫉妬深い幼馴染が張り付いているため、皆こっそり慕っているわけですけどね。

その幼馴染というのが、ファラ様の隣に座る魔法使いのルーファス様です。彼は目の前の机に置かれたチェスの盤を見ながら、口を開きました。

「そうそう、あんなにイチャついているのにね」

プラチナブロンドの髪と紫の瞳を持つルーファス様も、これまた美形さんです。ファラ様をかばって魔族の魔法にかかり、長らく眠りについておりましたが、その魔族がファラ様によって倒されたことで目を覚ましたのです。

その身を預かっていた大神殿からファラ様のもとへやって来た彼は、公には大神殿からの客人ということになっていますが、この城の中では勇者一行の枠に入れられているのです。リュファス様よりはやや劣るものの、大変優秀な魔法使いでいらつしやるので、結界の再構築にもご尽力いただいているのでした。

そのルーファス様の向かいに座り、チェス盤をじつと眺めているのは、エルフのルフ

アーガ様。肩の上で切りそろえられた銀髪と、同じ色の瞳を持つ彼は、十四、五歳の少年にしか見えません。ですが、実はこの中で一番長く生きていらっしやるのです。四百年前の勇者の旅にも参加していたそうですから、少なくとも四百歳以上なのは確実です。「時が経てば経つほど、言いづらくなってしまうたでしょう」

彼もルーファス様と同様、チェス盤に視線を落としたまま、どうでもよさそうに言いました。恋愛^こには不介入だと公言しているだけあって、本当に無関心なのですわね……以前は私とグリード様を強引にくっつけようとしていたくせにと、少しだけ苦々しく感じてしまいます。いえ、決してルファアガ様のご意見が凶星だったからとか、そういうわけではありませんよ？

「このままでは埒^ちが明きませんので、皆様のお知恵とお力をお貸しいただきたく存じます」

私の隣でベリンダが皆様に訴えました。

……実は、一向に告白できない私に業^{ごう}を煮やしたベリンダが、姫様に相談したのです。すると姫様が、グリード様には内緒で皆様を集められました。そして今、こうして相談会という名の羞恥^{しやうち}プレイの真つ最中というわけです。

でもルファアガ様の言う通り、時が経てば経つほど言葉が出なくなるのですよ。最初

の日は「好き」の「す」までは言えたのに、今では「グリード様」と呼びかけるだけで精一杯です。

「はい？」と言って私を振り向くグリード様と視線を合わせることもできず、「な、何でもありません……！」とそっぽを向いて言う始末。

何ですか、そのツンデレぶりは！ この際、自分で自分にツッコミ入れますよ、ええ！……実は、このツッコミ属性も告白できない原因の一つだったりします。何か、自分で自分にツッコんでしまうのですよね。ベリンダが聞き耳立ててるのに告白するってどうよ？ とか、暗くてお互いの顔もろくに見えない中で告白ってアリなの？ とかね！

もう、脳内の私は大忙しですよ。あれこれ考えていく傍^{そば}から、自分にダメ出ししてま

すから。つまり告白しなきゃと思って口に出そうとするものの、そんな自分に自分でツッコミを入れてしまい、恥ずかしくてツンデレ発生、となるわけです。まさに、自分の敵は自分というやつですね。

まさか「好き」と一言告げるのが、こんなに大変だったとは……

それでも伝えることを諦めきれないのは、言うだけでも大変な言葉を、グリード様は

ずっと伝え続けてくださっているからです。それなのに私が告白を簡単に諦めてしまえば、女が廃ります。

そこでふと、ミリー様が言いました。

「そういうえば、アーリアには精霊がついているんでしょう？　精霊はベリンダとの会話も聞いているはずだし、もうとつくにグリードに伝えてるんじゃないの？」

「あ、そうですね」

私はポンッと手を打ちました。グリード様が護衛としてつけてくださった精霊さんたちは、今も私の傍にいるそうです。翠以外の幹部が倒された今、もう危険はないはずなんです。グリード様は「ヴェルデがまた現れるかもしれませんし、殿下もいますから」と……

その殿下って、アルフリード殿下のことでしょうか？

アルフリード様はシユワルゼの第二王子で、姫様の兄君です。いたって温厚なお方ですが、存在感がものすごく薄いお方でもあります。

魔族であるヴェルデを警戒するのはまだ分かりませんが、アルフリード様を警戒する必要などないように思えますけどね。

……そういうえば、私が魔王城から帰った時に顔を合わせて以来、アルフリード様のお姿を見ていないような……？
 なんとなくその理由に思い当たる節はあるのですが、それは今は横に置いておくとしましょう。

とにかく、私が告白しようとしていることが、精霊さんたちの口からグリード様に伝わっていないわけがないのです。

けれど、レナス様が首を振りました。

「残念だけど、グリードには伝わってないみたいだよ。知らせてないって、アーリアの周りの精霊たちが言ってる」

レナス様は何代か前の勇者の血を受け継いでいるせいかな、精霊の姿は見えなくても、声は聞こえるそうです。

「え？　知らせてない？」

キョトンとする私に、ルファア様がチェス盤から顔を上げて言いました。

「以前、あなたは精霊に対して、緘口令を敷いたでしょう？」

エルフであるルファア様には、精霊の声も姿も見えるそうです。

「緘口令……」

そんなことありましたっけ？　と記憶を探ってみれば、確かにアルバトロの王女ティ

アナ姫に啖呵を切った時、愛の告白も同然の言葉を口走ってしまった私は、「グリード様には言っちゃダメですからね」って精霊さんたちに頼んだのでした。

「ま、まさかそれがずっと続いていたと……?」

思いもよらぬことに、私は目を見張りました。あれはいつでしたっけ? 確か、舞踏会の直前のことでした。その舞踏会の最中に魔族の幹部が侵入して、私は攫われて、助け出されて……とあまりに衝撃的な事件が連続して起きたので、すっかり忘れておりましたよ。

「あー、あのさ、その緘口令のこともあるんだけどさ……」

レナス様があさっての方を向き、頬をほりほりと掻きながら口を開きました。そのしぐさに、私は悪い予感を覚えずにはいられません。

「実は、精霊たちもこの状況を楽しんじゃっててさ。いつアリアが告白するんだろうと、わくわくしながら見守ってるんだよね」

「ひいひい!!」

私は思わず奇声を上げておりました。ちょ、ギャラリーはベリンダだけじゃなかったんですか!? ますます告白しづらくなりましたよ!

「も、もう無理かも……」

「しっかりして、アリア! 精霊がアリアをストーリーカーしているのなんて、今に始まったことじゃないでしょう!」

とても素敵なことを思い出させてくれてありがとう、わが友よ……って笑えねえ!

つまり衆人環視の中で告白するようなものじゃないですか! 無理、絶対無理です!

「もういいです! 諦めますから!」

「チェックメイト」

私の叫びに重なるように、ルファアガ様の静かな声が響きました。次に響いたのは、ルファアス様の残念そうな声です。

「あーあ、また負けた」

「けれど、今回は私も少しヒヤツとしましたよ」

ルファアガ様はそう言っただけで笑うと、ソファから立ち上がり、部屋の真ん中に立つ私の方を向きました。

「さてと。それでアリア、ここまでさんざんのろけておいて、諦めるわけですか?」

「の、のろける……?」

笑顔のままそう問われて、私は面食らいました。誰かのろけたと言うのでしょうか? 「ええ、のろけですよ。ここにいる皆はちゃんと相手らしきものがあるから、生暖かく

見守ってくれていますけどね。片思いの相手に告白するならまだしも、あなたの場合はすでに両思いで、相手が告白を受け入れてくれることが分かっているんです。つまり、あなたの悩みはのろけ以外の何物でもありません」

「う……」

確かにそうです。私の隣に立つベリндаには婚約者がいます。姫様とリュファス様も婚約していますし、ミリー様とレナス様は恋人同士。ルーファス様はファラ様に夢中ですし、ファラ様も他の男性に興味はないようなので、この二人もお互いが相手と言えなくもありません。つまりルファアガ様以外は、皆曲がりなりにも相手がいるわけです。

それとはまったく逆の立場……すなわち恋人がいない人の立場になって私の話を思い返してみると、「リア充爆発しろ！ 勝手にやってろー」とツッコミを入れたくなります。確かにのろけにしか聞こえません。

そして他人ののろけ話ほど、聞いていて楽しくないものはありません。私だってベリндаののろけ話をさんざん聞かされて、辟易へきえきしていたわけですからね。皆様はちゃんと相手がいて、しかもお優しいので、こうして私の相談に乗ってくださいていますけど。

「す、すみません……」

どうも私はいつの間にか、頭がお花畑状態になっていたようです。

「……とは言うものの、あなたの性格上、自分の気持ちを素直に伝えるのが難しいのは分かります」

身を縮める私に、ルファアガ様はふっと笑いました。

「私は基本的に、恋愛ことには不介入なんですけどね……あなたとグリードの仲が安定することは、世界の安定に繋がりますから」

ルファアガ様はそう言うと、不意にミリー様に問いかけました。

「ミリー。グリードのこれからの予定はどうなってます？」

「もう少ししたら、親衛隊の連中に剣の稽古けいこをつけることになってるわ」

ミリー様がチェストの上の置き時計を見ながら答えました。

ちなみに今は、城の周辺や街の方に異変がないか巡回しているはずです。だからこそ、こうして皆でこっそり集まることできたわけです。

ミリー様の言葉を聞いたファラ様が、微笑みながら立ち上がりました。

「では、稽古にはグリードの代わりに私が行こう」

「え？」

思わぬ発言に、私は驚きました。けれど、どうやら驚いているのは私だけのようです。今度はレナス様が、にっこり笑って言いました。

「稽古の後は、確か東の結界の補強に立ち会う予定だったよね？ そっちは僕が行こうか？」

すると姫様の隣に座るリュファス様も、笑みを浮かべました。

「私も付き合おう」

「え？ え？」

私は目をパチパチさせて、皆様を見回します。

「では、そういうことで。……ルイーゼ姫」

ルファアガ様は締めくくると、私に口にした後、姫様の方を見ました。姫様は心得たとはかりに笑って頷くと、私に向かって突然こう言ったのです。

「アーリア、今からあなたに休暇を与えます。あとのことはベリンダにやってもらうから、今日はもう仕事をしなくていいわ」

「はい、姫様！ お任せください！」

私の隣で、ベリンダが元氣よく返事をしました。

「きゅ、休暇……？」

私はというと、一人だけ事態についていけてません。一体何がどうなって……？

戸惑う私に、ルファアガ様が近づいてきます。それも、とてもよい笑顔で！

「さあ、これで舞台の準備は整いましたよ。これでいいですよね、アーリア？」

「へ？」

ルファアガ様は私の前まで来ると、手にしている杖の先でトンツと床を突きながら、にっこりと笑いました。

「では、行ってらっしゃい」

その直後、私の足元の床が突然光を發しました。ぎよつとして下を見た私の目に飛び込んできたのは……私をぐるりと取り囲むように、床に幾重もの円と記号が光によって描かれていく光景でした。

——移動の魔法陣。

つまり私は今から、空間を超えてどこかへ飛ばされるということです。

でも、一体どこに……!?

「ルファアガ様、私をどこへ……!？」

「とにかく、後のことはご心配なく」

私の問いを遮ったルファアガ様の笑顔を最後に、私の視界は光で白く塗り潰されました。

不思議と眩しくはないのですが、私は思わず目を瞑ります。

直後、足元がぐらつと揺らぎました。……いいえ、揺らいだのは私ではなくて、きつと空間そのものです。

——飛ばされる……！

私は目をぎゅつと瞑こつたまま覚悟しました。一体どこへ飛ばされるのかという不安はありませんが、ルファア様が私を危険な目に遭あわせるわけがないと確信してもいたのです。

不意に床が消失しました。少なくとも、私にはそう感じられたのです。けれど、私の身体が下に落ちることはなく、ただ奇妙な浮遊感に包まれていきました——

浮遊感がなくなり、地に足がついている感覚が急に戻ってきました。そして、さつきまでとは違った空気が自分を取り巻いていることを感じます。

……無事にどこかへ着いたようです。

そつと目を開けた私の視界に、とても見覚えのあるものが入ってきました。

——花壇に規則正しく植えられたキャベツ。そう、キャベツです。

単にレンガで囲まれているから花壇っぽく見えるだけで、植えられているのは花ではないのですから、畑とでも呼ぶべきシロモノかもしれません。けれど、私たち使用人は

皆「花壇」と呼んでいるのです。

「もしかして、ここ……使用人棟の裏庭ですか？」

私は辺りを見回しました。野菜やハーブだけでなく、ちゃんと花が植えられている花壇もあります。それは、あまりにも馴染なじみ深い光景でした。

使用人たちの憩いの場であり、皆が自由に使っている裏庭。前にグリーンド様と一緒に訪れ、空中散策をしたあの場所です。

「なあんだ……」

私は安堵のため息をつきました。

でもルファア様は、なぜ私をこんなところに……？　そして私は、これからどうすればいいんでしょうか？

裏庭の一角にポツンと立ったまま考えていると、不意に、何の前触れもなく、グリーンド様が現れたのです。

「アーリア！」

「ひゃあ！」

私がビクンと飛び上がってしまったのも無理はないと思います。だって、いきなり目の前に人が出現したら驚きますよね？

「アーリア、一体何事です!？」

「へ?」

グリード様は、いつになく慌てている様子でした。

「突然、貴女の気配が姫の部屋から消えたと思ったら、貴女につけていた精霊も引き剥がされました。一体何があつたんです!？」

「え、ええっと……」

精霊が引き剥がされた? そのことに驚きながらも、私はなんと説明すればよいものか分からず、視線をさまよわせました。

ここにきて、ようやくルファアガ様の意図が分かったのですよ。要するに、グリード様と私を二人きりにして、告白の舞台を整えてくださったことですよね? 精霊を引き剥がしたのも、そのためですよね?

ありがたいといえば、ありがたいのですが……せめて、ちゃんと説明してから転送しなくてはいけません。

「ええっと、その、突然休暇をもらいまして……」

私は考え考え言いました。本当のことを言うわけにはいかないので、ここに飛ばされる理由をひねり出さなければ……

自分でもちよつと苦しいなと思いつつ、私はこう口にしました。

「姫様から、今日はもう仕事をしなくていいと言われたのです……でも突然だったので、やることがないと言ったら、ちよつと部屋に来ていたルファアガ様が、そ、その……」

「ルファアガが、貴女をここに飛ばしたと?」

「は、はい」

「……そうですか」

そう言ったとき、グリード様はなぜか沈黙してしまいました。けれど、すぐに顔を上げ、苦笑めいたものを浮かべます。

「きつとそうすれば、俺がすぐさま貴女のところへ行くと分かっていたんでしょね」

「た、多分」

「今、心話で『仕事は他の人間が代わりにやるから、二人でゆっくりするように』と言っていました。魔王城から帰って以来、ゆっくり話す機会もないようだからと」

「そ、そうですか……」

どうやらさつきグリード様が無言になったのは、ルファアガ様から心話と呼ばれるメッセージを受け取っていたためだったようです。

確かにシユワルゼに帰ってきてからというものは、二人でゆっくり過ごす時間はなかつ

たように思います。

シユワルゼに帰還した時、まだ城内には魔族との戦いの爪あとが色濃く残っておりました。グリード様と青が戦った中庭などは、未だにメチャクチャなままです。

そんなわけで、私自身もグリード様たちも、復興のために休みなく働いてきました。今日だって姫様やルフアーガ様がお膳立てしてくださらなければ、こうしてゆっくりできる時間など取れるはずもありません。

「アリア」

グリード様が微笑みながら、私に手を差し出しました。

「せっかく皆がくれた時間です。散歩に付き合ってくださいますか？」

当然、私に否やはありませんでした。

「はい……」

私はグリード様の手に自分の手を重ねながらも、ついこんなことを口にしてしまいます。

「特に予定もありませんからね。つ、付き合って差し上げます」

……告白より先に、うっかり出てしまうツンデレ発言の方をどうにかすべきかもしれませんね。

グリード様と手を繋いで裏庭を歩きます。二人でこうしていると、空中散策をした夜のことが思い出されてなりません。

あの時の私は、どうにか求婚を撤回させられないかと思っていたんですよ。けれど、今は自分の気持ちをどう伝えたらいいのかと悩んでいるのですから、人生何が起ころるか分からないのです。

「ここは何も被害がなくて何よりでしたね」

歩きながら、グリード様が呟きました。私はハッとグリード様を見上げ、その手をぎゅっと握ります。

「……はい。よかったです」

魔獣が城のあちこちに出現して暴れたため、大きな被害が出ました。この裏庭は被害を免れたようですが、城の正門から入ったすぐのところにある庭園なんて、踏み荒らされてそれは無残なものだったのです。犠牲者が一人も出なかったのが、奇跡だと思われるほどに。

実際に魔獣が暴れるところは見ていませんが、シユワルゼに帰国してからその惨状を見た私は、とてもショックを受けました。だって、この城を襲った魔族の標的は私だっ

たわけですから。

グリード様の求婚をさっさと受けて、女神神殿にでも身を移しておけば、この城が狙われることはなかったんじゃないか……そう思ったりもしました。国王陛下や宰相様をはじめ、皆様そんなことは一言も口にせず、私の帰りを喜んでくださいましたけれど。

きつとグリード様も、私と似た気持ちなんだと思います。口にはしないものの、今こうして休みなく働いているのは、多分自分が原因だと思っているから。だからこそ、ここは被害がなく何よりだって言ったのでしよう。

そうして二人で、黙ったまま歩きます。料理人たちが植えた野菜やハーブの花壇から、庭師たちが植えた花壇の方に向かって歩きながら、私はいつ言おう、どう言おう、とぐるぐる考えておりました。

今までさんざん失敗してきたので、声をかけることすら怖くなっている自分がいます。でもベリンダも精霊さんたちもいない今がチャンスなのです。

私はグリード様と繋いでいない方の手を握っては緩める動作を、何度も繰り返します。そしてようやく覚悟を決めると、握った拳を胸に当てて「よし」と顔を上げました。

今だけはツツコミもツンデレも封印です。ただ、自分の素直な気持ちを伝えることだけを考えましょう。たとえその後、恥ずかしさのあまり床をゴロゴロ転がるハメになる

うとも！

「グリード様、あのっ……！」

私が声を上げたのと同時に、グリード様は足を止めました。そして私の方に向き直ると、笑みを浮かべてこう言ったのです。

「アーリア、貴女が好きです。この世界の何より誰より、貴女を大切に思っています」
そのあまりのストレートな言葉に、私は一瞬絶句し、それからカアと顔に血が上ってくるのを感じました。

私は素直じゃなくて、相手が異性、それも大切な人であればあるほど意固地になってしまいます。なのに、グリード様はそんな私に呆れることなく、いつでも素直に自分の気持ちを伝えてくださるのです。……本当に、敵いません。

でも……意地っ張りな私には、ちょうど良いのかなとも思うのです。素直じゃない私とストレートなグリード様。ピツタリじゃないですか？

だから、頬を赤く染めながら、小さな声で言いました。

「私も……私も、です」

そう声に出したら、不意に胸のつかえが下りたような気がしました。今なら……きつと言えます。

覚悟を決めた私は顔を上げ、グリード様の目をしっかりと見て、その言葉を口にしました。
「私も、グリード様が好きです」

……それは、とても簡単な言葉でした。でも、そこに込められた気持ちは簡単でも単純でもなくて、伝えるということがどれだけ難しいかを実感させられます。

けれど、その単純な、子供でも言ってしまう言葉に込めた私の気持ちは、多分グリード様には伝わったのでしよう。

「ありがとう、アーリア」

彼は顔を綻^{ほころ}ばせ、本当に嬉しそうに笑ったのです。胸がキュンとなると同時に、私は申し訳ない気持ちになりました。

「い、今まで言葉にできなくて、ごめんなさい。好き、です。グリード様が、本当に、本当に、好きです」

「うん」

グリード様は頷き、そつとかがんで私に顔を寄せます。

「アーリア……好きですよ」

近づいてくる、とても綺麗な顔。「私も……」と囁^{ささや}いてから、私は目を閉じました。

グリード様の吐息が、頬に、それから唇にかかり、そして――



……とりあえず、口をふさがれていたので私のツツコミとツンデレは出る幕がなかった、とだけ言っておきましょう。

* * *

——一方、姫の部屋ではアーリアがいなくなった後、こんな会話がなされていた。「大丈夫かね？ アーリアは」

つい今しがたまでアーリアが立っていた場所を見つめながら、レナスが呟く。すると、同じようにその場所を見ていたルフアーガが微笑んだ。

「大丈夫ですよ。心配はいりません」

その口調には、妙に確信が籠こもっていた。

「お膳立てはしましたから、まず問題ないでしょう」

「お膳立て、とは？」

ファアラがそう尋ねると、ルフアーガはクスツと笑う。

「グリードは他人に無関心ですし、人の心の機微を感じ取るなんてことはありません。で

も、たった一人だけ例外がいることは、皆よく分かっているでしょう？」

「なるほどね、そういうことか」

リュファスが頷き、それからクスクスと笑い出した。

「……リュファス様？」

「すまない、姫。だけど可笑おかしくて」

彼に続き、レナスやミリー、そしてファアラまで笑い出す。突然部屋に広がった笑いの輪を、姫とベリンダ、それにルフアスは不思議そうに眺めていた。

「どういことだい、ファアラ？」

ルフアスがファアラに尋ねた。

「そうか、お前はグリードと知り合っただけだから、分からないのも当然だな」

ファアラは笑うのを止め、ルフアスたち三人に説明する。

「グリードは他人に無関心だが、唯一の例外がいる。それがアーリアだ。彼女のことにだけは、グリードは敏感なんだ。精霊に監視させて、彼女の動向を常に把握している。

そのグリードが、アーリアの様子がおかしいことに気づかないわけがない。なのに、何も言わないということは……」

「つまりグリード様は、アーリアが告白しようとしていることをご存知だと？」

姫が首を傾げて問う。それに答えたのはミリーだった。「多分ね。毎晩何かを言いかけてやめるなんて、アーリアの行動はさぞ不審だったことでしょうよ。あのグリードがそれを見逃すはずがないわ。アーリアに直接聞か、そこそ精霊の力を使って探ると思うの」

「でもそれはしていないって、精霊たちが言ってるんだよね」
レナスがまたクスクス笑った。アーリアから引き剥がされ、見物できなくなったと不満を漏らす精霊たちの声を聞きながら。

「だからね、きつとグリードは、アーリアが何を言おうとしてるのか分かってるんだと思うよ。その上で、アーリアがちゃんと言葉にするのを待ってる」

「だからのろけ以外の何物でもないんですよ、あれは」
ルフアーガが苦笑を浮かべて、締めくくるように言った。

「まあ……」

姫は呆れ顔で吐息をつく。ベリンダも口をあんぐり開けていた。彼女たちが呆れているのはグリードに対してなのか、それともアーリアに対してなのか。いや、他人から見れば「勝手にやっつてろ」とでも言いたくなるような二人に、呆れ果てているのだろう。

「何だか、尻尾をパタパタさせながら飼い主のご褒美を待つ犬の姿が思い浮かびまし

た……」

ベリンダがボソツと呟く。その瞬間、全員の脳裏に浮かんだのは、アーリアの言葉を「まだかな、まだかな」と尻尾を振りながら待つ勇者の図だった。

「……勇者に『待て』をさせるなんて、さすがアーリア」

感心したようにレナスが言うと、ルフアーガがふつと笑った。

「犬も食わないのろけ話に、ぴつたりのたとえですね。アーリアの性格を考えると、このままずっと平行線をたどりそうだったので、少しおせっかいをさせていただきます」
介入するつもりはなかったんですけどね、と付け加えたルフアーガに、ファラが首を傾げる。

「おせっかいかい？ それは精霊を引き剥がして、二人きりになれるところへ送ったことか？」

「いえ、アーリアが告白しやすくなるよう、まずは自分の気持ちちを口にしろって、きつとグリードに心話で伝えたんです」

そこまで言うと、ルフアーガは可笑しそうに笑った。

「グリードに言われれば、アーリアだって言わないわけにはいかないですからね。自分から好きだと言うより、相手の言葉を受けて『自分も』と伝える方が、はるかに楽でしょ

うし。そこに思い至らないグリードは、やつぱりまだまだかなとは思いますが、相手の言葉を待つことを覚えるなんて、彼もだいぶ成長したと思いませんか？」

「確かにね」

リユファスがしみじみと頷いた。

無表情、無頓着、無関心。それゆえ「心を持たない人形」と言われていた昔のグリードを知るだけに、感慨深いのだろう。

「うまくいってるといいな、告白」

レナスが呟くと、ミリーも頷く。

「本当よね。これでもダメなら怒るわよ、私は」

「多分、うまくいってるんじゃないですか。グリードが精霊に、来るなど命じているくらいですから」

先ほどまではルファークによって留め置かれていた精霊たちだが、今はグリードの命令に従ってここにいる。つまり、誰にも見られたくないような場面が繰り広げられているということだろう。

「では今夜はお祝いということで、皆様を夕食にご招待しますわ。その席で、二人に詳しく話してもらうことにしましょう。私たちには、それを聞く権利がありますわよね。」

だって、こうして巻き込まれているんですもの」

姫が明るく言って、にっこり笑った。兵士たちの稽古場へ行くべくソファから立ち上がりながら、ファラも笑う。

「それは楽しみなな」

「そうよね。バカバカしいのろけ話に付き合ってたんだものね」

「酒の肴さかなにからかってやるうよ」

ミリーとレナスが悪戯いたずらっぽく笑った。その笑いは隣またたく間に全員にうつり、姫の部屋には明るい笑い声がいっまでも響いていた。

——そんなことは露知らず、勇者とその恋人は誰もいない中庭で、つかの間の逢瀬おうせを楽しんでいた。

廻る刻めぐるとき

1 帰郷

「おかえりなさい、アーリア」

「おかえり」

「おかえりなさいませ、お嬢様！」

六年ぶりにミルフォード領へ帰省した私とグリード様を、懐かしい面々が迎えてくれました。

私の母に、兄に、私たち兄妹の乳母うはをしてきていたばあやと使用人たち。そして……

「よう、よく来たなあ」

のほほんとして手を上げたのは、父のライオネル・ミルフォード子爵です。

私たちが到着する時間に合わせて、皆がこうして揃って……

ぐっと胸に迫るものを呑み込みながら、私は精一杯の笑顔を見せました。

「ただいま、皆……！」

——今回の帰省は、宰相様に促されたことでした。

最初は断ったのです。何しろミルフォード領は辺境といっても差し支えないほどの田舎で、シユワルゼ城からだとは片道三日はかかります。数日滞在することを考えると、十日ほど休暇をいただかなければなりません。姫様の輿こし入れが間近に迫ったこの大事な時期に、そんなに長く休めるわけがないじゃないですか。

もちろん姫様は反対せず、むしろぜひにと言ってくださるでしょうが、私自身が納得できません。ペリンダがいれば、話は別だったかもしれませんが……

実はペリンダはつい先日、外交官をしている幼馴染おきななじみと結婚して、侍女を辞めてしまったのです。彼女の分まで働かなければならない現状にあって、十日間も留守にするなど無理な話です。

けれど、宰相様は全然問題ないと仰おっしゃいました。

「あなたが留守の間、侍女長に仕事を代わってもらおうよう手はずを整えてあります。彼女はマリアージュ様の輿入れ準備も経験していますから、むしろあなたより上手くやってくれるでしょう」

なんと私の上司である侍女長様を動員するつもりの方です。確かに有能な侍女長様なら、私とベリンダ二人分の働きをすることも可能かもしれません。

けれど……となおも洩る私に、宰相様はいつもの辛らつな口調をひそめ、諭すように言いました。

「あなたは六年前にここへ来て以来、一度も帰省していません。ルイーゼ姫についてエリユーシオンに行ってしまうえば、帰省はますます難しくなるでしょう。ですから、今のうちに帰省しておくべきです。ライオネルも、一度帰ってこいと云っていたでしょう?」

「そ、それは……」

私が魔族に囚われていた時、両親と兄は心配して、シュワルゼの城まで出向いてくれたのです。で、領地に帰る際に、父が言ったのですよね。『屋敷の皆も会いたがってるから、エリユーシオンに行く前に一度くらい帰ってこいよ』って。

「で、でも、いくら侍女長様が代わってくださるとはいえ、十日もお休みをいただくわけには……」

そんなに長く姫様の輿入れ準備に駆り出されては、侍女長様ご自身の仕事が立ち行かなくなってしまう。

私がそう訴えると、宰相様は眼鏡の奥で微笑みました。

「心配いりません、十日もあげませんから。あなたに与える休暇は、その半分の五日間です。帰省にはグリード殿が同行なざるので、移動時は魔法を使っただく予定です」

「グリード様が……?」

確かに移動の魔法陣を使えば、あつという間にミルフォード領まで飛ぶことができますが……

「グリード殿には、もう話を通してあります。彼もライオネルともう一度話がしたかったそうで、二つ返事で引き受けてくださいました」

さすがは常に用意周到な宰相様。すでに段取りをつけていたわけです。

「さ、さようですか。それでは、お言葉に甘えまして……」

それ以外に、一体何が言えたでしょうか。まあ、考えてみればグリード様が十日の間、私から離れるわけがありませんものね。私としても、あの方を放置しておくのは心配ですし。

そんなわけで、五日間の休暇が正式に認められました。そして、その第一日目である本日、私たちはシュワルゼの城からミルフォード家の屋敷へとやって来たのです。

「まあ、まあ、お嬢様! しばらく会わないうちに大きくなられて……!」